
銀魂 - 私と桜と真選組！ -

李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 - 私と桜と真選組！ -

【Nコード】

N9992X

【作者名】

李

【あらすじ】

真選組を訪ねてきた少女、天王寺ルナ（てんのうじ るな）は、近藤や、土方、沖田、そしてその姉ミツバの幼なじみだった。沖田たちも知らないルナの過去に万事屋、坂田銀時も関係していた

！？他にも家出少年の入隊とか、寺門通一日局長とか。シリアスあり、ギャグあり、恋あり、桜とともに成長する少女の生き様、ご覧あれ！

第零話 プロローグ（前書き）

初めまして！李といます。

この小説は、銀魂にオリキャラを投入したお話です。どちらかというと、真選組メインになってます！けど、万事屋も出てきます^^
駄文かもしれませんが、どうかお付き合いください><

それでは、「銀魂 - 私と桜と真選組！ -」始まりです！

第零話 プロローグ

「ねえ、るーちゃん。」

「なあに？」

「僕ね。大きくなったらもつと強くなって、るーちゃんを守る！」

「本当？じゃあ、ずっと一緒にいてくれるー？」

「うんっ！大きくなったら、あいつも倒して、四人で暮らすんだ！」

「えー？みんなで暮らしましょうよ！……でも、本当に一緒にいてくれる？」

「本当だよ。じゃあ約束しよう！」

「うん！」。

二人でわらいながら、指きりをした。

私は今でも覚えてる。

あなたは覚えていますか？

私と過ごした日々のこと。あの時のこと。約束。

会いたい。あの人に、あなたに。

第一話 私と再会とバスーカ（前書き）

本格的に話を進めて行きたいと思います！

あの人達が出てきます><

第一話 私と再会とバズーカ

「どこだっけ……?」

まだ日が昇り始めてまもない早朝。人気の少ない道を、フラフラと歩く少女が一人。栗色の髪を左側で高く結び、瑠璃色の瞳をした少女。路地に入っては出て、右の道へ行っては戻り、左の道へいったりと……どこからどう見ても迷っていた。

「あれ。ここか。」

ようやく少女は、一つの建物 真選組屯所の前で立ち止まった。門の目の前まで歩いて行くと手で、門を軽くたたく。

「すみませーん! 誰かいませんか? ってか、開けて下さーい!」

早朝にもかかわらず大声を張り上げる少女だったが、誰も出てこないどころか、返事すら聞こえない。

「あれ……誰もいないのか ドオオオオオン!

その直後、少女の目の前から門は消えた。門の代わりに煙が立ちのぼり、やがてその中から人影が現れた。

「オイ総悟! お前何やってんだ! 門壊れちまったじゃねえか!」

中から現れたのは黒髪無造作ヘアーに鋭い目つきの男 真選組副長土方十四郎だった。そして、また別の影が現れる。

「あーあ。こりゃまた派手にやっちゃいましたねィ。土方さん。」

次に現れたのは肩にバズーカを担いだ、亜麻色の髪に蘇芳色の目の真選組一番隊隊長沖田総悟。涼しい顔をしていたが、肩に担いだバズーカからは、煙が上がっていた。

「何俺のせいにしてるんだよ！テメーがやったんだろ！？」

「いや、俺は土方さんに向けて打ったんですぜ。土方さんに当たれば門は壊れなかったじゃないですか。」

「ふざけてんのかテメエ！」

土方が刀を取り出し、まだ涼しい顔をしている沖田に向ける。そして沖田も再びバズーカを構える。そんな中、少女は二人を見ながら目を輝かせていた。

「だいたいな、お前まだ……」

「十四郎さん！そーちゃんっ！」

今まで黙っていた少女が急に弾むように言ったので二人は少女の方を向く。二人はケンカをやめ、少女の方をじつと見つめる。

「ルナ………？」

「うんっ……」

少女

天王寺ルナは笑顔でうなずいた。
てんのうじ

第一話 私と再会とバスーカ（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます！

さあーこれからどうするかな……；

第二話 私とジミーと屯所探検

ルナは、嬉しそうに微笑みながら二人と一緒に屯所内を歩いていた。

「マジかよ……お前、本当にルナか？」

「何度も言ってるじゃん。ルナだよ。ルナ！……もしかして、私の事、忘れちゃった……？」

「んな事あねえけどよ……！」

「まあそんな事いいじゃないですか。久しぶりの再会なんですぜ？
るーちゃんとは。」

この少女ルナは、真選組結成前 土方達がまだ武州にいた頃の知り合いであった。なぜ、久しぶりなのか、それは土方達が江戸に上京した後、親戚に引き取られたからであった。

「そーちゃん、近藤さんは元気？」

「元気ですぜ。元気すぎて、逮捕されそうになるくらいでイ」

「そっか、風邪とかで寝込んだ事ないもんね！そーちゃんは？ちゃんとご飯食べてる？」

「もちろんでさあ」

どっかの母親が言いそうなセリフだな、と土方が呆れているなか、沖田は嬉しそうにルナと話を続ける。

「あっちの方、土方さんの部屋なんでムシャクシャしたらあっちに向けて、バズーカ打つとストレス発散できるから、ルナもやってみたら……」

「するんじゃないねえ！」

「そーちゃんは変わらないね〜」

「それから、あっちの池には鯉がいるんでイラついたら石投げ……」

「オメーはどこでストレス発散してんだよ！道理で鯉が少なくなっ
たと思った！近藤さん泣いてたもん！」

沖田に、屯所内を説明されながら、きよろきよろと周りを見回すルナの目にふとバトミントンのラケットを持った土方達とは少し違う隊服を着た男が映った。男は、ルナ達に気付くと軽く会釈をして、近付いて来た。

「副長、隊長、おはようございます！えっと……そちらの方は……？」

「あ、初めまして。天王寺ルナといます。」

「こちらこそ始めまして。真選組監察の山崎退です。」

ルナが頭を下げ、山崎も頭を下げる。

「言っておくが山崎。るーちゃんは、武州にいた頃からの幼なじみ
でイ。ふざけたマネじゃがったら、どうなるかわかってんだろっな

「？」

「ハイハイ。何もしませんって！……でも、へえ〜武州に居た頃からの……ってえええええ！？幼なじみ！？って事はミツ……」

言葉の続きを喋ろうとした山崎は、隣にいた沖田のただならぬ殺気を感じ、息をのんだ。

「どうしたんです？山崎^{ジミー}さん」

「何でも……ってあれ？今、地味って言った？ジミーって言った？俺、地味って言っただけ！？」

「普通わかるだろ。お前が地味な事くらい。」

「そうですね〜ジミーさんが近づいて来なかったら、私わかりませんでしたもん。」

「副長！？ルナさん！？酷すぎでしょ！普通わかるとか、ルナさんに至っては初対面だよな？さっきまで山崎と書いてジミーだったのに、もうそのまんまジミーさんじゃん！」

そんななか、楽しそうに笑っているルナを悲しそうな目で見つめている人物　沖田がいた。悲しそうと言うよりは、心配そうな、そわそわとした様子で……。

そんな沖田を、土方は見逃さなかった。

第二話 私とジミーと屯所探検（後書き）

局長さしおいて先に出ちゃったよザキ…^^：

次は出てくるかな…近藤さん；

第三話 私とゴリラと信頼できる人たち（前書き）

本日は、銀魂42巻発売日ですね^^！

表紙は、今井信女ちゃんと佐々木異三郎さんだそうです！

ジャンプで読んでた時にも二人が出てくる話の土方さんがカッコ良
くって…！

二人もカッコ良かったです！買いに行かなければ！

今回の話は、前回先を越されてしまったゴリ…局長がです！

第三話 私とゴリラと信頼できる人たち

局長室。襖の前に立ち、近藤さん入るぞ、と声をかけると、ああ、と声が返って来た。襖を開ける。土方が入るのに続いて沖田も部屋に入った。

「おお。トシと総悟か。どうしたんだ？」

座布団にどっかりと座り、二カつと白い歯を見せて笑うゴリラが…ではなくこの男、真選組局長、近藤勲である。仕事をしていたのか、机には写真やら資料やらが置いてあった。

「近藤さん。客人でさア。るーちゃん、こっちこっち。」

「近藤さんっ！お久しぶりです！」

沖田に手招きされ、ルナは、近藤の前に立ち深々と頭を下げる。近藤は、驚いた顔をしていたが、おお！と声をあげた。

「ルナか！久しぶりだな〜！何年ぶりだったかな、大きくなったなあ。」

「近藤さんもよりゴリ…いや、男前になっちゃって〜」

気のせいか、涙目になっている近藤がルナを見上げて笑う。ルナも苦笑いした。

「どうしたんだ？急にこんな所に来て……」

「それは、その……」

「？」

近藤に尋ねられて、言いくそげに口ごもるルナを見て、土方が口を開く。

「近藤さん、ルナについてお互いに聞きたい事もあるだろう。少し話さないか？」

「ああ。いいぞ。」

土方が真剣な顔をして言ったので、沖田や、近藤もきちんと向き合う。

数秒の沈黙が流れた後、初めに口を開いたのは土方だった。

「まずルナ。お前は、親戚に引き取られたはずだったよな？」

「ハイ。」

「…じゃあ、今までどこに居たんだ？あと、なんでここに来た？」

「どこって……親戚の家に居たんですよ。それに、会いたかったからここに來たんです。」

「なんで、刀を持っている？」

「この刀は、昔も今も肌身離さず持つてるだけですよ。」

また、沈黙が流れる。土方は、ため息をついた。

「ウソだな。」

土方はキツパリと言う。近藤や沖田も、お見通しとでも言うように、大きく頷いた。

「あはは…やっぱり、ばれちゃったか…！」

「ばれちゃったじゃねえよ。俺達みたいな仲で、ウソをつく必要なんて無いだろ？」

土方に言われ、ルナは、俯く。

「何ですかイ…？何でウソなんてついたんでイ、ルナ。」

「今更、驚く事なんざねえよ。知り合いに引き取られたお前が、こんな所に来た時点で驚いてんだからよ。」

「そつだぞ。言にくいことでもなんでも、俺たちは気にしないぞ。」

「

まるでルナの言いたいことがわかっていている様に優しく声をかける。

「ごめんね。やっぱり、みんなには敵わないね。」

言わなきゃ……。

「隠してるとかそんなつもりは無かったんだけど……あのね。」

不安そうな顔をしたが、やがて決意を決めたように口を開いた。

「私は………」

「鬼兵隊に居たの……!」

第三話 私とゴリラと信頼できる人たち（後書き）

「おっおい！山崎！俺達のせいにするなよ！」

「てめえら全員、土道不覚悟で切腹だアアア！！！！」

「ぎゃああああ！」

「これが本当の鬼ごっこだアアア！」

刀を取り出し、隊士を追いかけ始めた土方を近藤達三人は呆れたように見る。

「あの……私っ……」

土方を見ていた近藤と沖田に、ルナがおずおずと話しかける。

「鬼兵隊に居たって……どういう意味なんで？ーちゃん。」

「その……面倒見てもらってたっていつか……」

「面倒見てもらってたって……」

「山崎イ！まずはお前からだアアアア！」

「ギヤアアア！」

ドオオオオン！！

「土方死ねやアアア！！！！」

「総悟オ！！テメエは黙ってるオオ！」

先ほどまでルナの隣に居た沖田もいつのまにか鬼ごっこに加わり、何の話をしてたのかすらわからなくなってしまうていた。

聞かれないのならできるだけ、言いたくない…そう思っていたルナは、安心した。

武州に居た時も、今もちつとも変わらない…。騒がしいけど温かくて…羨ましい。

あの人…変わってない。

ルナが土方や沖田をボーッと眺めていると近藤が声をかけてきた。

「なあ、ルナ。」

「はい？」

「言いくいなら無理に言わなくていい。落ち着いたらまたゆつくり教えてくれ。」

「……はい。」

「それはそうと ……真選組に入らないか？」

「え？」

「嫌か？」

「いや…嫌…じゃないんですけど、どついつ意味…」

「ならいいよな！」

「だから…」

意味がわかりません、と言おうとしたルナを無視し、近藤は続ける。

「みんな注目ー！ー！ー！」

近藤の声に鬼ごっこをしていた土方や沖田も振り返る。

まさか……

「新人隊士が入ったぞ　！ー！ー名前は…天王寺ルナちゃん！女隊士だ！ー！ー！」

「マジっスカー！局長ー！」

ええええええええ！？

ルナの嫌な予感は的中した。

第四話 私と鬼ごっこと真選組入隊（後書き）

なんか、重要な所で話がずれているような……；
申し訳ありません；

一応これでルナも真選組隊士ですね！（

感想や評価をくださると嬉しいです>><

第五話 私と出会いと枝垂れ桜(前書き)

回想シーン(?)入ります!

一話で終わりますのでお付き合いください^^

第五話 私と出会いと枝垂れ桜

数年前

自分が何者なのかわからなかった。人間なのか。天人なのか。

自分のことは何も知らない。目覚めてあったものは、刀と「天王寺ルナ」と書かれた一枚の紙切れだけ。

何をすればいいのか、どこに行けばいいのか……何もわからないまま気がつけば私は、刀を振っていた。

今日もまた、刀を持った男とやりあった。だけど、ここ数日の疲労のせいか、意識は途絶えた。

最後に見たのは、満開の枝垂れ桜だった……

武州は春の暖かい陽気に包まれていた。

見渡す限り田畑ばかりの道を、歩いている男が三人。

「近藤さん、まだ着かないんですか？」

まだ十歳ぐらいの少年が、大柄な男に話しかける。

「ああ、もう少しで着くさ。」

「少ししか歩いてねえのにもうこれか。」

その隣にいた黒髪の男も話に入る。
すると、少年は男を睨みつけた。

「まだ行けるもん！」

「だが、もう大分歩いているからなあ…よし！じゃあ、あの桜の木で休憩な！」

大柄な男、近藤が少し進んだ所にある桜の木を指差すと、沖田は目を輝かせた。

「じゃあ競争しよう！」

「望むとこじゃねえか！」

「待てよー！総悟！トシ！」

桜の木目指して駆けて行った沖田と土方を近藤が追う。

「やった〜！いっちばーん！」

桜の木に着くなり、三人は座り休憩する。

少し休むと沖田は立ち上がり、桜の周りをウロウロし始めた。

「あっ！」

「どうした？総悟。」

沖田がいきなり声をあげたので、土方や近藤も沖田の方を振り向く。

「この子…！」

この子　　沖田が指差す先にいたのは栗色の髪を持つ少女だった。

歳は沖田と同じくらいだろうか。

気絶していたが、所々怪我をしており腰には刀をさしている。着ていた着物もボロボロで少女のものか、別の誰かのものか、血も付いていた。

「ひでえ怪我だな……」

「トシ！手当てするぞー！」

近藤と土方は少女の手当てを始めた。沖田はその様子を心配そうに見る。

…誰…？

少女が意識を取り戻した頃には、手当ても終わっていた。

「あの……助けってくれたんですね。ありがとうございます。」

「いやあ、良かったよ。血まみれで倒れていたもんだったから……」

「……」

人と話すなんて何年ぶりだろうか。何を話せばいいのか…。

「何処から来たの？」

「わからない……」

ふと、今まで黙っていた沖田が少女に話しかけた。

「いきなり聞くんじゃないよ。困ってんだろ？」

「わかってらあ！ねっ、じゃあ名前は？」

「名前……えっと……天王寺……ルナ……。天王寺ルナ。」

「僕は、沖田総悟っていうんだ。よろしくね、るーちゃん！あと、こっちが近藤さんで……こっちが……マヨ方！」

「誰がマヨ方だ！」

「る……ちゃん……？」

「うんっ！ルナだからるーちゃん。あのさっ……僕と友達になつてよ！」

「友達……？」

目を輝かせながら話しかけてくる沖田に、ルナは正直戸惑っていた。友達なんて初めてだし、そもそも人とこんなに話すことも無かった。

「ねっ近藤さん、ルナと遊んでいいですよね！」

「まあいいが……ルナちゃんは手当てしたばかりだから程々にな」

「はい。行こつるーちゃん！」

「あつ……うん」

まだ少し戸惑ってはいたが、沖田に手をひかれ歩いて行く。桜の木の下にいるのは近藤と土方だけになった。

「いいのか？近藤さん」

「ああ、見たところ、あの子一人っぽいしな。」

「刀持つてる時点でおかしいもんな。………つたく総悟の奴……」

「いいじゃないか。でも、総悟が自分から話しかけるなんて珍しいよな……」

気がつけば、ルナと沖田はすっかり打ち解けており、笑顔で走り回っていた。

「同い年ぐらいだからかなあ」

「どうするんだ？」

「どう……って、あの子、帰る場所も行くあてもなさそうだしな……よし！うちの道場に来てもらうか！」

「とんでもねえお人よしだ……この人。」

……これが私たちの出会いだった。

何者だかわからない私を受け入れてくれたみんなとの出会い。

あの満開の枝垂れ桜は今でも私の目に焼き付いている。

第五話 私と出会いと枝垂れ桜（後書き）

枝垂れ桜って綺麗ですよ。

画像とか探してみるとすごい綺麗なものが見られますよ！

次回からはまた四話の続きに戻ります！

第六話 私と満月と真月光（前書き）

とりあえず入隊篇はこれで完結です！

さあ、ルナ！しっかりやっておくれよ！お願いだから！

第六話 私と満月と真月光

「初の女隊士、ルナちゃんの入隊にカンパーイ!!」

屯所内から聞こえてくる賑やかな声。豪快な男の笑い声や、酒を注ぐ音、バズーカの音…は気のせいだろう。

「局長！ついにやりましたね！男だらけの暑苦しい屯所にオアシスがあああつ」

「さあ！今日は入隊記念パーティーだ！飲め飲めー！」

…結局入隊することになってしまった…！

近藤の無茶苦茶な発言のため、断りづらくなってしまったこともあり、ルナは真選組に入隊することになったのだった。一応、自分の意見も言っただつもりだったが…

「まあいいじゃねえですか。ハイハイ、るーちゃん。」

「ま、お酒は飲むけどさ…」

沖田に酒を注がれ、ルナも飲み始める。

「あれ、ルナさんいくつ何です？」

「18。」

「ええっ？未成年じゃないですか！」

「まあまあ、細かいことは気にしない〜！結構いけるんですよ？私。」
酒を飲み干しながらニコニコと答えながら、沖田とどンドン酒を空けていった。

「ところで近藤さん、るーちゃんは何番隊にいくんですか？」

「そっちなあ……」

近藤と沖田がルナの所属する隊をどこにするか考えていると、山崎が疑問をぶつけた。

「あの……失礼なのですが、ルナさん剣術の方は……」

山崎がルナの方を振り向いてみると、ルナは腰に差した刀を取り出し山崎に向けていた。

酒瓶を片手に笑っているルナは

「一手合わせてみる？」

酔っていた。

「もう酔ってるじゃないですか！」

「はっはっは！ザキ、ルナは結構強いぞ〜」

その時、ルナはある一人の人物がいないことに気がついた。そう、土方がその場にいなかったのだ。ちなみに、山崎のように実はその場に居るが気づいていないだけという訳ではない。

隣を見ると近藤が腹踊りを始める勢いで酒瓶を振り回していた。

「私ちょっと風に当たってきますね。」

取りあえずその場から出ようと思ったルナは立ち上がり襖を開け外に出た。

外に出たルナの目に映ったものは、雲一つない夜空には黄金に光る満月だった。

「わあ……」

いつのまにか、土方を探すことなど忘れて、月に見とれて縁側に座ってしまっていた。

綺麗な月だなあ。そういえば、道場に初めて行った夜もこんな満月だったっけ。

ルナは刀を取り出し月光に刃を当てた。

『真月光』……それが、この刀の名前であった。ルナに残されたた

った一つの過去を知るための手掛かりのこの刀は、月光に当てると青白くキラキラと光る。

「ルナ…？何してんだ」

後ろを振り返ると土方がルナの刀を見ながら立っていた。

しばらくボーっと土方を見た後、最初の自分の目的を思い出しあつと声をあげた。

「十四郎さん！今までどこに居たんですか？」

「別に…普通に部屋に居ただけだが？探してたか？」

「あゝいやあ、探そうとしてたんですけど、満月に見とれちゃって

…」

おい…と呆れる土方をよそにあはは…と苦笑いするルナ。

「でも、まさかまたルナと一緒に居れるなんてな。しかも隊士として働くなんて…」

「……はい。鬼兵隊でも刀、振ってたんでね。」

「そつか…」

鬼兵隊で刀を振る、と言うことは攘夷活動をしている鬼兵隊の手伝いをしていたということ。

気まずい空気が二人の間に流れる。

聞かなきゃ。

ずっと聞こうと思っていたことを聞こう…そう決意し、口を開いた。

「ねえ…十四郎さん。あの…ミツバ…さんは…」

「……！」

ルナの思わぬ発言に土方は下を向く。

沖田ミツバ。彼女はムカつく部下の姉、おしとやかで綺麗で優しく、武州の時もルナが本当の姉のように慕っていた人物だった。

……自分もそのミツバに好意を寄せていた。だが、もう彼女は。

話さないといけないことだと、ルナが来たときから思っていたが、自分が言っていていい話なのか。

決断ができなかった土方は黙ってしまった。

「十四郎さん……？」

何で黙っちゃうの？

それは今もミツバさんのことを考えているから？

「ルナーっ！トシーっ！ちょっと来ーい！！」

その時、中から近藤の明るい声が聞こえた。酔っているのか、声が少し裏返っていた。

「あっはーい！」

中に戻ろうと刀を腰に差し立ち上がる。土方の横を通り襖を開けようとすると、

「また……」

ずっと黙っていた土方が口を開いた。進もうとしたルナも足を止める。

「落ち着いたら話す。」

「……ハイ。私もそうします。」

お互いに真実を話せる日が来るまでゆっくり待とう。

一言返し、襖を開けた。そして二人は中へ入って行く。

真っ暗な夜空に浮かぶ満月だけが、その姿を見ていた。

第六話 私と満月と真月光（後書き）

なんか前回から急に長くなってますよね……；

読みにくくないでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9992x/>

銀魂 - 私と桜と真選組！ -

2011年11月9日16時08分発行